

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 ソルジェニーツィン『マトリョーナの家』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を800字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄にPDFへのリンクを張ってあります。)



第19回のツイキャス読書会の課題図書は、ソルジェニーツィンの『マトリョーナの家』です。

朗読はこちら <https://youtu.be/bb8uZ82rGbc>

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『マトリョーナの家』感想文

『おや、まあ、なんてこったろう！(P. 55)』

マトリョーナの暮らしぶりは、老いて貧しくても自分の背中が馬だと言い、一冬(200日)を乗りきる為に自給自足の生活をし、パワフルに働きまくる。

年をとっても、自分はまわりの人に頼まれればタダで助けるけれども、まわりの方はマトリョーナを助けてくれない。そもそもマトリョーナ自身が助けを求めているのかもしれないが閉鎖的な村だと感じた。

村人もみんな貧しいので、自分が生きるのに精一杯で、他の人を助ける余裕はないのかもしれない。

マトリョーナが亡くなった途端に、いろんな人が来るが、服や家が欲しかった為であり、悲しいことに彼女自身を理解している人はまわりには誰もいなかった。

マトリョーナには、あまり怒る描写がない、役所へ出掛けてもうまくいかなくて愚痴をこぼすだけ、そして、愚痴を言っても始まらないと眼に見えない相手に腹を立てるだけ。山へ出掛ければ、腹を立てていたことも忘れてしまう。

過去の辛い経験(ファジェイが戦争から帰って来たり、エフィムが帰って来なかったり、子どもを6人も亡くしていたり。)から、

マトリョーナは、ファジェイの手によって精神的には斧で殺されており、それ以降は欲もなくただひたすら働いていただけなのかもしれない。

ネズミやゴキブリに囲まれて生きるのは、いい気分ではないと思うが、それが気にならないぐらい、生活が困窮していた辛い時代だったのだと。

現代人の私たちは、家でゴキブリ一匹で悲鳴をあげてしまっただろうし、もしお店で出された料理にゴキブリが入っていたら激怒すると思う。

しかし、食事がゴキブリ入りでも怒らなかった数学教師は自分の大事な服の間違えでついにマトリョーナに怒ってしまう場面が印象に残りました。

それに対して『おや、まあ、なんてこったろう』と反省するマトリョーナという人物は、結局、村にはいなくてはない縁の下の義人お婆さんなのだと思います。(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

『マトリョーナの家』感想文

台所ではゴキブリがうようよ。壁紙と壁との間の空洞をネズミがガサゴソ…。ちょっと想像すると気分が悪くなりそうな住まいだけどなぜか嫌な気分にならなかった。むしろ読み進めるうちに清潔感さえ感じました。貧しくて、劣悪な環境でありながらいつも元気で朝から働いているマトリョーナの太陽のような笑顔がそう思わせてくれたのかもしれない。

高齢で持病を、かかえながらも一生懸命に働いていて、さらにお金のためだけでなく無償で近所の人のお手伝いをしたりしている姿を読んで自分が恥ずかしくなりました。私は働く必要があるから働いています。お金を貰うために。それはごく普通の事だけど、本当の意味での労働、働くという意味を考えさせられました。もし、私に働かなくても裕福に暮らせるお金があったら働いていなかったかもしれない。

私が一番好きなマトリョーナの言葉は

(引用はじめ)

「ねえ、どうしたもんだらうね、イグナーチッチ！そりゃ、手助けはしてやらなくちゃね…堆肥がなけりゃ、ろくな収穫はあがないからねえ。でもね、あの連中の働きぶりといったら、見ちゃいられないよ。女どもなんか、シャベルによりかかったまま、早く工場の汽笛が十二時を鳴らさないかと、そればかり待ってるんだから。おまけに、役所じゃあるまいし、だれが出勤したのだれが欠勤したのと、帳面につける始末だからねえ。あたしに言わせりゃ、仕事なんてものは、合図もへちまもなくたって、ただやいのやいの働いているだけで、おや、もうお昼かい、もう夕方かいてもんだけどね」

(引用おわり)

私は、シャベルに寄りかかっている女どもとたいして変わらないと思いました。

マトリョーナの最後はかわいそうでしたし、この貧しい村で皆を照らす太陽が消えてしまったことがすごく悲しかったです。

(おわり)

マトリョーナについての『労働』

『しかし、マトリョーナの顔はいつまでも曇ってはいなかった。私は老婆が良い気分を取り戻すための確実な手段を持っていることに気づいた。それは仕事であった。』（新潮文庫ソルジェニーツィン短編集 p23）

夫と6人の子どもたちを失い、天涯孤独だったマトリョーナにとって、献身対象は労働だった。じゃがたら堀りや泥炭拾い、木イチゴ摘み、山羊の世話。村の茂みに腰をかがめ、重い荷物に背中を曲げて帰ってくるマトリョーナの表情は満ち足りている。彼女は常に働くことで自己形成してきた。そしてその献身がとても板に感じているように感じる。

割りに合う・合わないという価値観で見ると、マトリョーナを理解するのに遠ざかってしまう。マトリョーナの日常からは自己犠牲の匂いは不思議と感じない。ただ、その時を精一杯生きている。この小説は、女性の献身の究極の姿が描き出されているように思う。

私は、拙いブログを書いているが、書き始めたのは“消費ではなく何かを生み出していく生活”を送るためにどうしていけばいいのか？書くことによってヒントを得たかったからだ。お金を出して空腹を満たし、電力会社が供給してくれるエネルギーを使ってもなお心が満たされない私の日常とは打って変わって、マトリョーナが消費しているのはジャガイモや大麦のひき割り、ヤギの乳や泥炭くらいだ。逆に働いて生み出しているものの価値は計り知れない。マトリョーナの日常こそが「何かを生み出す生活」だと気付かされた。

読み進めていると、マトリョーナの貧しさや過酷な生業に気が滅入ってしまう時もあったが、自分の労働を自分のものにしていくマトリョーナがうらやましく思えてくる。丁寧に暮らす彼女の日常には感謝があふれているように思えてならない。

「木の葉が散り、雪が降り積もり、それがまた溶けていった。ふたたび種をまき、ふたたび穫り入れがめぐってきた」そんな自然の移ろいにマトリョーナも溶け込み、生きて、最後は献身の結晶と化し、消えていった。彼女の足元にも及ばないが、私もそんな風に生きられたらと思う。

労働にウンザリしている今、この小説に出会えてよかった。

（おわり）

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『マトリョーナの家』感想

この小説の読後、私は世の中が「理不尽」で出来ていることを思い出した。私自身、偽善や悪意に覆われた日常に、あまりに馴染んでいて忘れていた。それ故に「良心と仲良くしている」マトリョーナに出会って、つい怯んでしまった。

イグナーチッチは古き良きロシアを求めて、タリノヴォ村のマトリョーナの下宿に辿り着く。その下宿でのゴキブリの走る音に「なんの偽りも悪意もなかった。」と感じたところに、これから出会う人間の「醜いものや悪しきもの」が暗示されていたように思えてならない。

無欲で善良だったマトリョーナの死が、周囲の人々の本性を一気に暴いていく様に、啞然とするしかなかった。マトリョーナの死後すぐに、セーターの無心をする親友、通夜の席で母屋の行方の駆け引きをする妹や小姑たち、俄然元気を取り戻して中二階を取り戻したファジェイ、手伝いが呼べなくなった時だけ思い出す義理の姉……と枚挙にいとまなく、眩暈がするくらいだ。

イグナーチッチに甥の成績を頼んだのも、ファジェイの帰りを待たなかったマトリョーナのピュアな負い目があったのだろう。だが、帰還後「ふたりともぶち殺してやる。」と叫んだファジェイの本意は、「エフェムと結婚して家を取りやがったな。」のように思えて仕方ない。そのエフェムも情婦を囲い、マトリョーナを裏切っていた。エフェムは、きっと今も生きているに違いない。

マトリョーナのことは、とても他人事ではない。翻って素朴に、自らの結婚式を祝い、葬式で悼んでくれる人間がどれほどいるだろう。あの善良なマトリョーナさえ養女のキーラしかいなかったのだ。「滑稽なほどばか正直」で「他人のためにただ働きをして」もさえた。しかし、世の中にはマトリョーナのような義人が必要だと作者はいう。村や都、地球にとっても。だからこそ、世の中は耳障りのいいセオリーやスローガン、寓話などで義人を作り出そうとしているのだろうか。無欲で善良であれば報われる…と。

その義人であるマトリョーナに与えられたものが、安らかな死に顔とマトリョーナを慕う下宿人だけだったことが、とても切ない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『二つの戦争 三人の男』

(引用はじめ)

『これが実の弟でなかったら、お前たちふたりともぶち殺してやる場所だって！』
その怖ろしい言葉は、四十年もの間、古い手斧（ちょうな）のように、この家の片隅に秘められていたのだ。

(引用おわり)

マトリョーナが、なぜあれほど、中二階にこだわったのか？

マトリョーナは、エフィムの帰ってくるのを、心のどこかで最後まで信じていたのだ、と私は思う。エフィムが帰ってくる可能性がある限りは、彼女は、家をそっくりそのままにしてきたかったのだ。マトリョーナは、まだ、エフィムを愛していたのだ。いや、愛そうとしていたのかもしれない。扶養者の喪失を証明して、年金を受給することはエフィムの死を認めることだ。彼女に夫の死を認める権利があるのか。最初の夫の死を認めてしまったことで、ファジェイの愛を裏切ってしまった彼女が、生活が苦しいからといって、エフィムの死を認めていいものだろうか？ もし、エフィムがひょっこり帰ってきたらどうするつもりだったのだろうか。彼を待っていたからこそ、彼女は貧困の中で耐え忍んで、生きていたのではないのか？ 法的な手続きによって、あの家は、マトリョーナと養女キーラのものになってしまった。その裏切りが、ファジェイの神経を刺激したのだ。彼が、キーラへの生前贈与を勝手に進めたのは、いよいよ、本格的に、あの手斧を振り下ろす時がきたと確信したからだ。数学教師が、下宿の願いをしたとき、マトリョーナは他の下宿先を勧めて丁寧に断ったが、彼が再度頼み込んだときは顔に喜びの色を表していた。そして、彼女が、数学教師の来歴を尋ねなかったのは、戦犯としてどこかで長い間服役してから現れたこの男に、エフィムの面影を重ねていたのからかもしれない。中二階が運び出されたときに、思わず勝手に数学教師の胴着を着てしまったのは、エフィムと数学教師を、混同したからだろう。数学教師に、つよく叱られることは、夫に叱られることの代償だったのだ。さらに、エフィムの裏切ったことへの自責の念が、彼女に、あの陰惨な轢死事件を引き寄せたのだ。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>